

平成24年度の全学英語教育報告

和田 珠実・大門 正幸・今村 洋美
西村 智・野田 恵剛・山田 伸明

1 はじめに

平成23年度の全学共通教育のカリキュラム改訂以来、全学英語教育科では全学共通教育科目のスキル教育科目として「英語スキルⅠ/Ⅱ」を実施している。当科目の基本方針や実施方法、授業内に実施した到達度確認テストの平成23年度までの結果については、既に大門他（2010, 2011, 2012）で報告済みである。本稿では、「英語スキルⅠ/Ⅱ」の2年目にあたる平成24年度に実施した到達度確認テストの結果について報告を行う。¹⁾

この授業は、新入生用の上級・中級・初級クラスとそれ以外の再履修クラスという4つのクラスで編成されている。上級・中級・初級のクラス分けは、入学時に受験したフレッシュマンテストの結果に基づいて行われる。使用する教材については、上級クラスのみ別のものを使用し、初級・中級・再履修クラスでは共通の教材を使用している。

この授業における到達度確認テストの柱となるのは、語彙に関する問題、文法に関する問題、読解方略に関する問題の3つであるが、語彙については、さらに、日本語を英語に訳す問題と英語を日本語に訳す問題の2種類に分けられる。初級・中級・再履修クラスの問題は共通であるが、上級クラスの問題はやや難易度が高くなっている。

以上のようなクラス編成、到達度確認テストの内容を考慮し、以下では「上級クラス」、「初級・中級クラス」、「再履修クラス」の3つについて、到達度確認テストの(i)語彙1（日本語を英語に訳す問題）、(ii)語彙2（英語を日本語に訳す問題）、(iii)文法、(iv)読解方略の4項目に関するテスト結果を別々に報告する。

2 到達度確認テストの結果

到達度確認テストの受験者は、春、秋学期それぞれ1年生2,338名、2,372名、2年生以上の再履修者225名、157名で合計2,563名、2,529名であった。1年生のレベル毎の受験者数は上級者309名、301名、初中級者2,029名、2,071名であった。なお、分析にはMac OS X版のSPSS Statistics 20を用いた。

2.1 上級者

上級者の到達度確認テストの結果は、図1～図8に示す通りである。なお、満点はテスト項目によって異なるが、比較を容易にするために、全てを100点満点に換算してある。したがって、図中の「平均点」は厳密には「正答率」のことである。なお、比較のため、図では正規曲線を示してある。

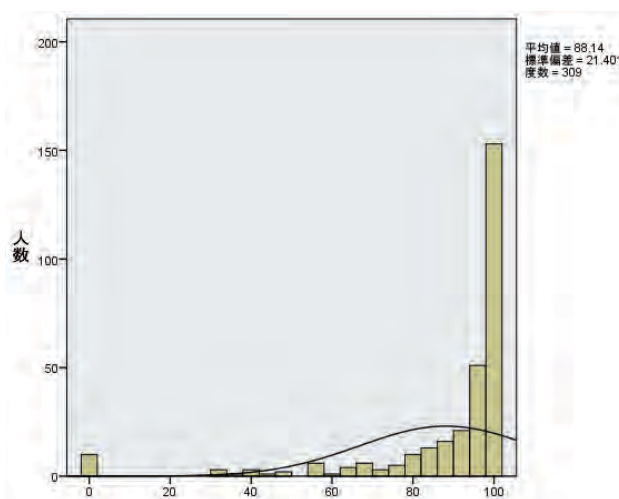


図1 上級者の語彙（日本語から英語）テスト結果（春）

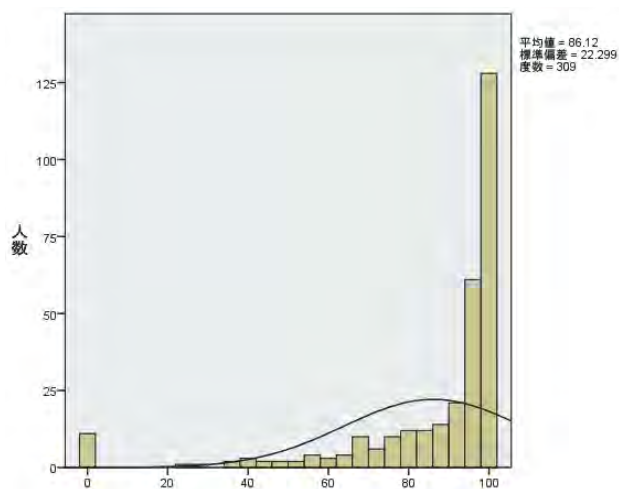


図2 上級者の語彙（英語から日本語）テスト結果（春）

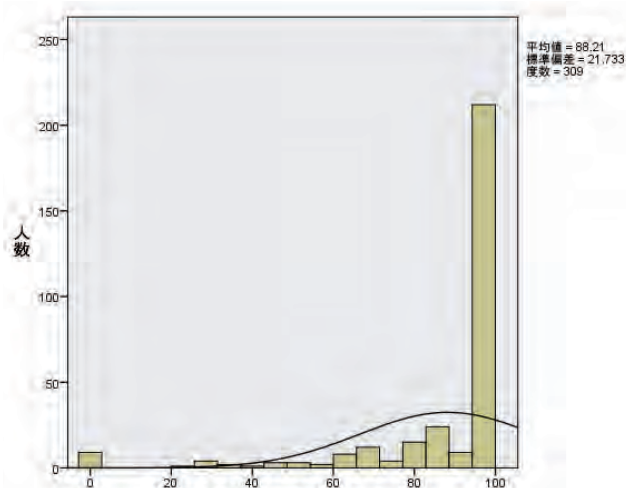


図3 上級者の文法テストの結果（春）

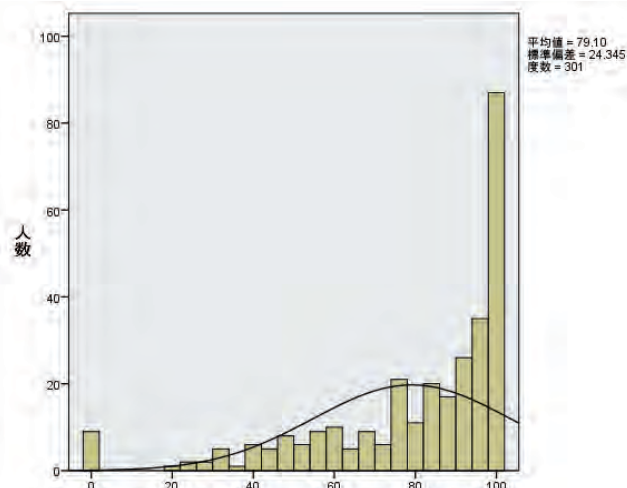


図6 上級者の語彙（英語から日本語）テストの結果（秋）

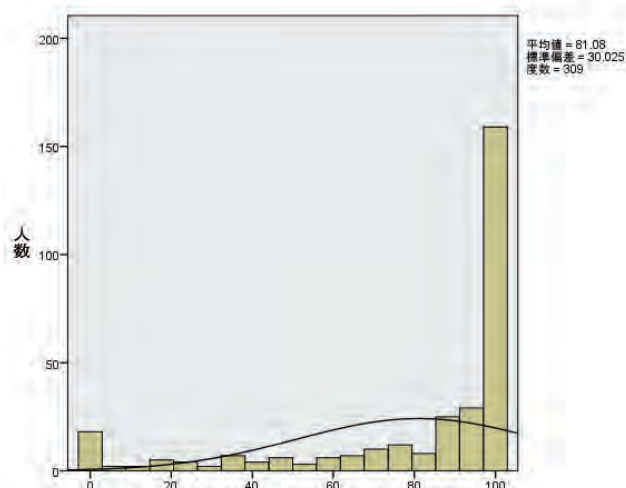


図4 上級者の読解方略テストの結果（春）

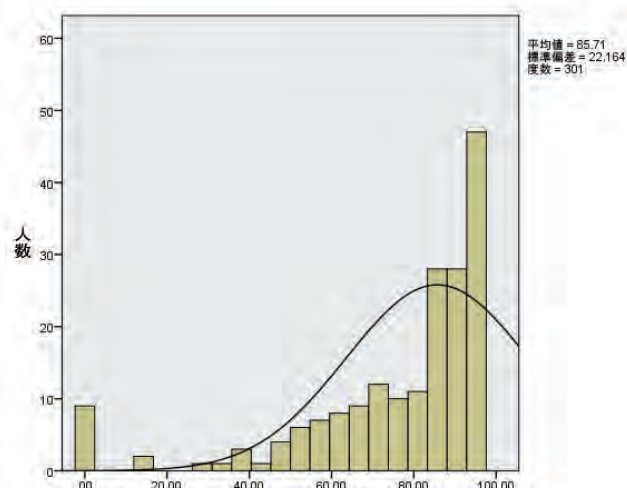


図7 上級者の文法テストの結果（秋）

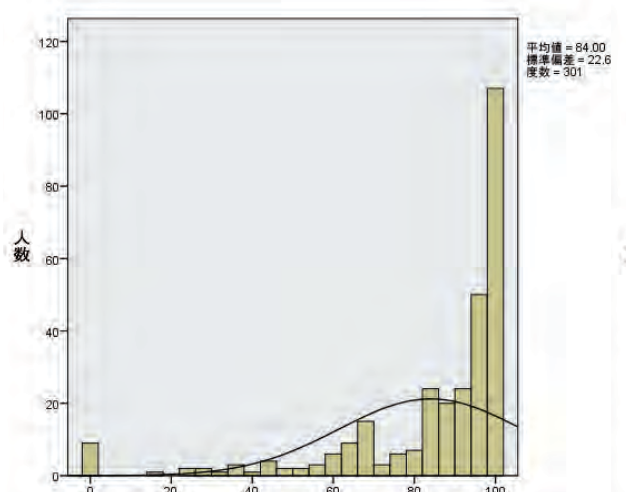


図5 上級者の語彙（日本語から英語）テストの結果（秋）

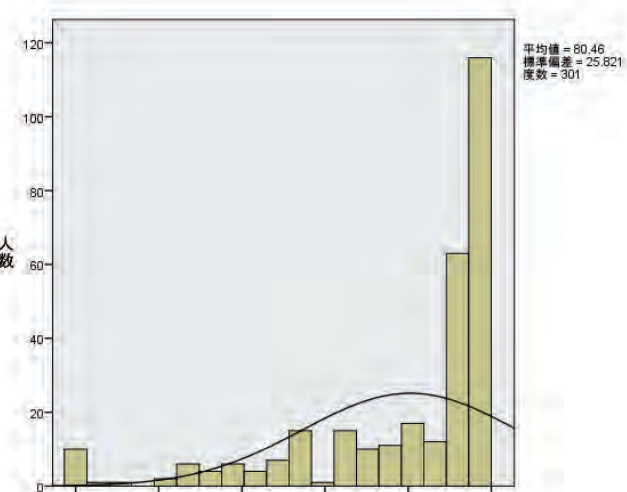


図8 上級者の読解方略テストの結果（秋）

上級者のテスト結果を見ると、両学期共に文法テスト、読解方略テストの正答率は大変高く、満点を取る学生も多いことが分かる。春学期の語彙が2種類ともにデータのばらつきは大きい、秋学期には高得点者の割合が多いことが分かる。英語スキルⅠは春学期のみの半期科目であり、英語スキルⅡは後期に開講され、通常は同じ教員が担当している。同じ担当者が通年教えることにより学習者の傾向が良く把握でき、的確な指導が可能となっている。上級者の結果は全体的に満足できる到達度に達していると言えるであろう。

2.2 初中級者

上級者の場合と同じように初中級者の到達度確認テスト4つの項目を100点満点に換算した結果を図9～図16に示す。

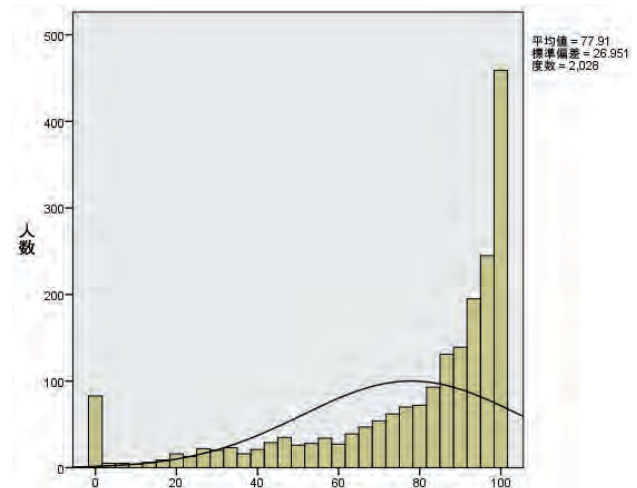


図11 初中級者の文法テストの結果（春）

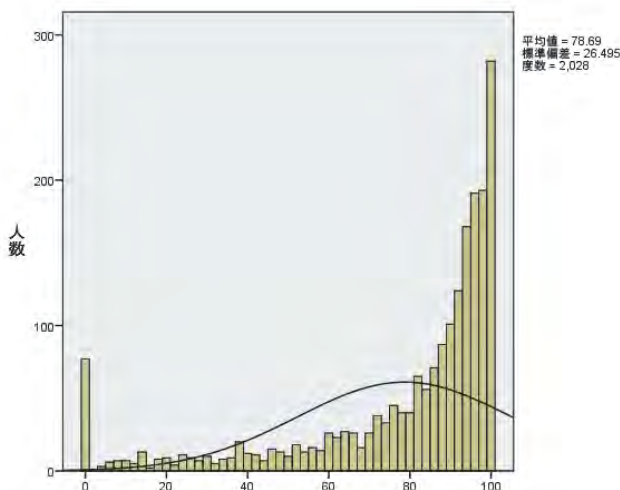


図9 初中級者語彙（日本語から英語）テストの結果（春）

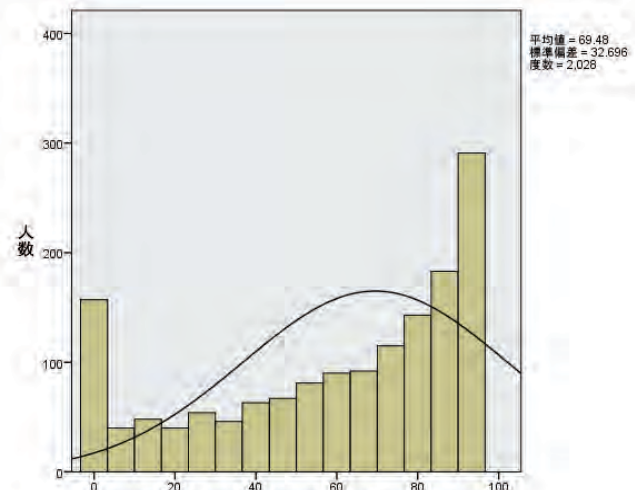


図12 初中級者の読解方略テストの結果（春）

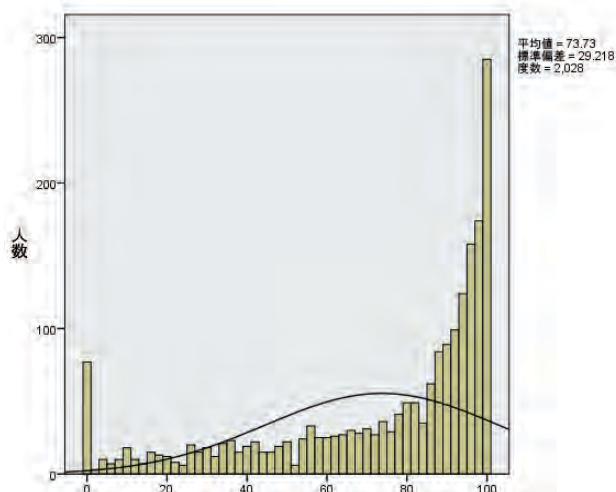


図10 初中級者語彙（英語から日本語）テストの結果（春）

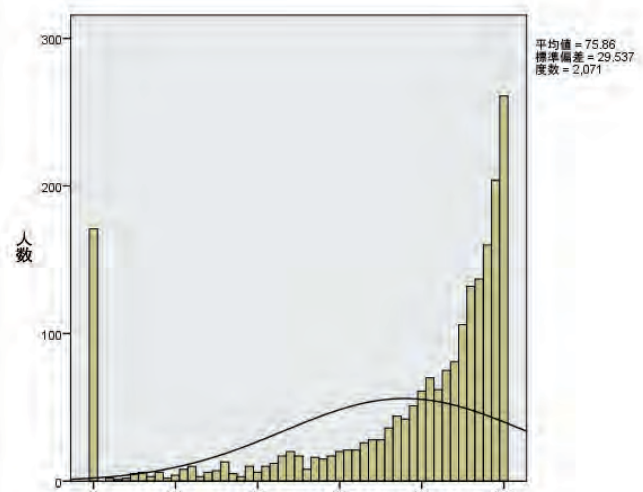


図13 初中級者語彙（日本語から英語）テストの結果（秋）

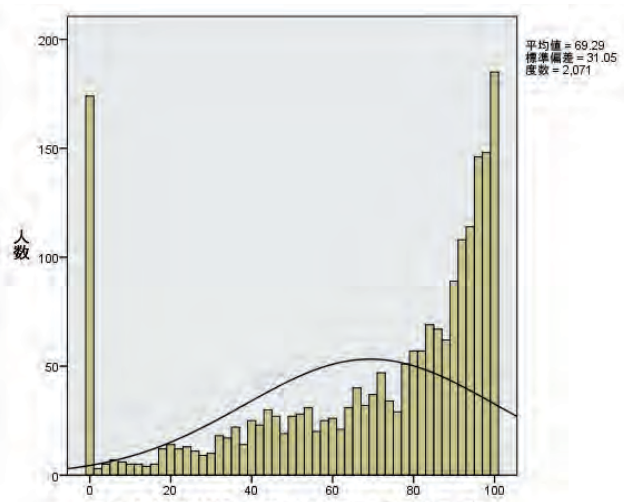


図14 初中級者語彙（英語から日本語）テストの結果（秋）

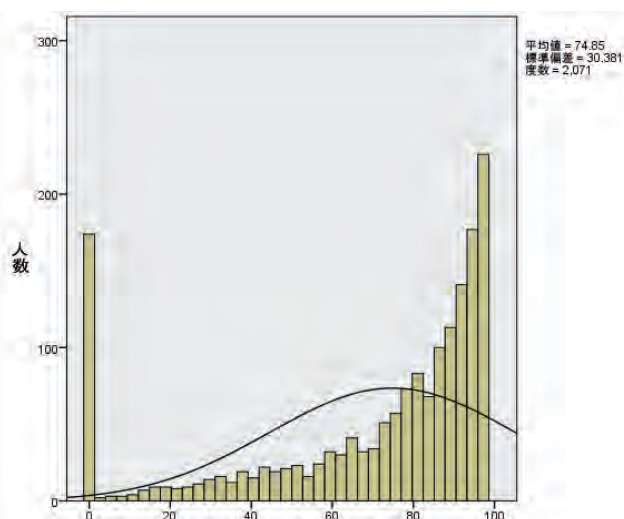


図15 初中級者の文法テストの結果（秋）

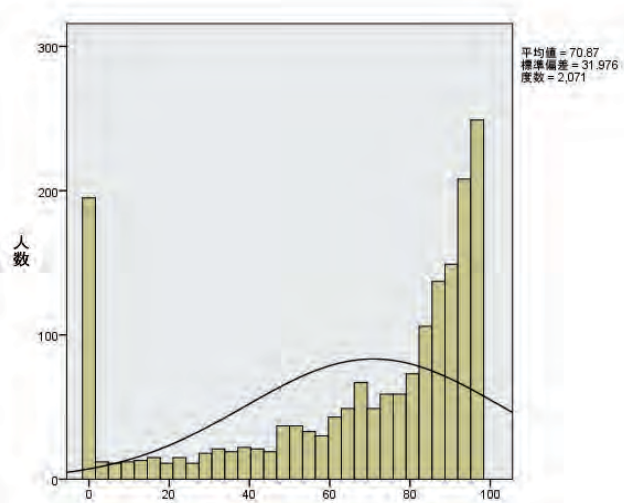


図16 初中級者の読解方略テストの結果（秋）

上級者の場合と同様、全体的に高得点者の割合が多い。これは、平成23年度に実施した到達度確認テストの結果と同様の傾向が見られた。

初中級者の結果で顕著なのは、0点の多さである。この0点のデータには、実際にテストを受験した学生のもも含まれるが、ほとんどは欠席者（＝テストを受験しなかった学生）の人数である。この欠席者は科目履修を途中で放棄した学生が多い。この現象は後期の0点の多さにも表れている。

秋学期は、春学期に比べ、語彙テストの平均点が、両方（日本語を英語にする問題が、英語を日本語にする問題）とも少し下がっている。これは、秋学期に、語彙の難易度が上がったことが影響していると思われる。

全体的にどのテスト結果も満点が多いが、春学期は満点以外の分布の幅が広い。これは英語力の問題もあるが、学習態度や学習方法に問題があるようである。この結果が多くの再履修者を出すことに繋がっている。平成25年度春学期の英語スキルⅠの総履修者数は2,501名であり、再履修者数はほぼ1割の251名であった。

2.3 再履修者

再履修者の到達度確認テスト4つの項目を100点満点に換算した結果を図17～図24に示す。

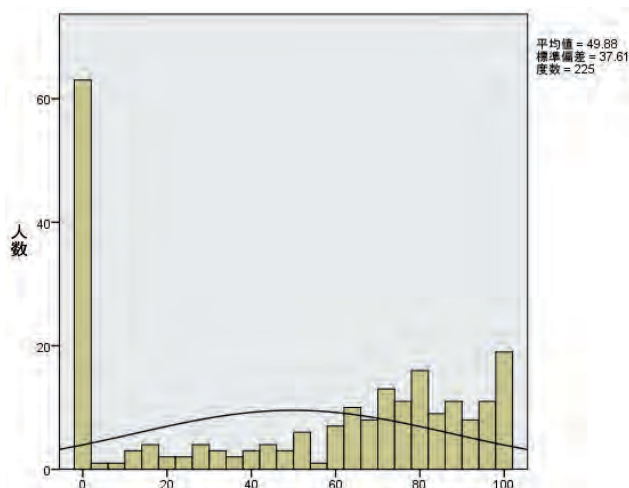


図17 再履修者の語彙（日本語から英語）テストの結果（春）

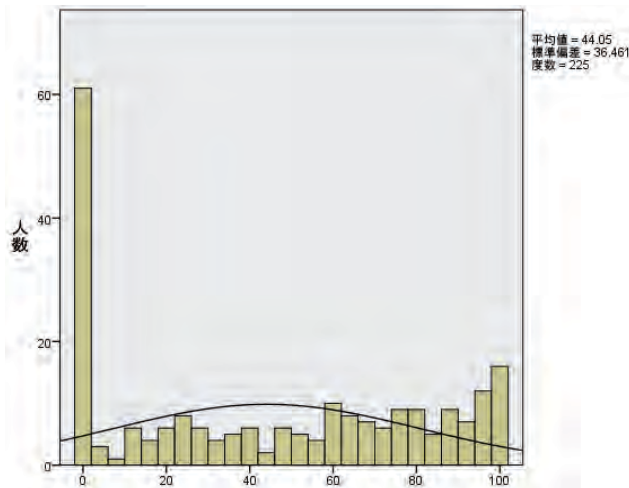


図18 再履修者の語彙（英語から日本語）テストの結果（春）

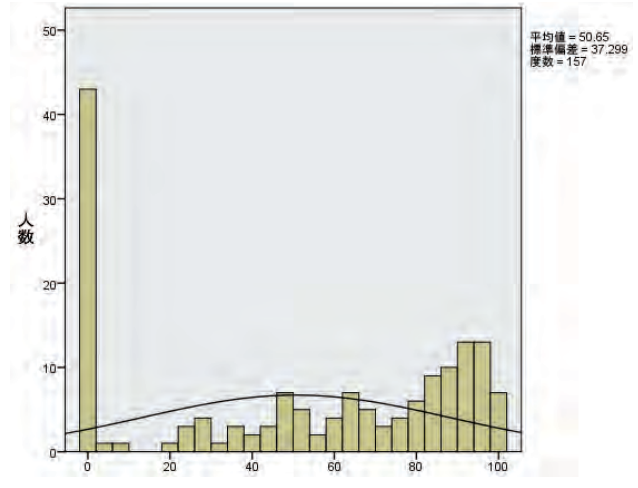


図21 再履修者の語彙（日本語から英語）テストの結果（秋）

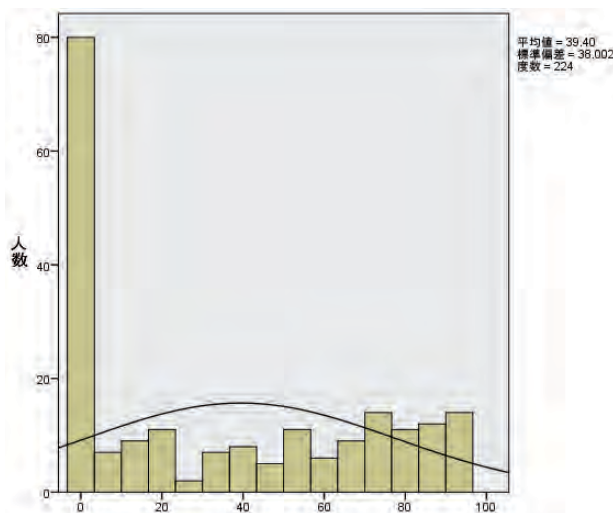


図19 再履修者の文法テストの結果（春）

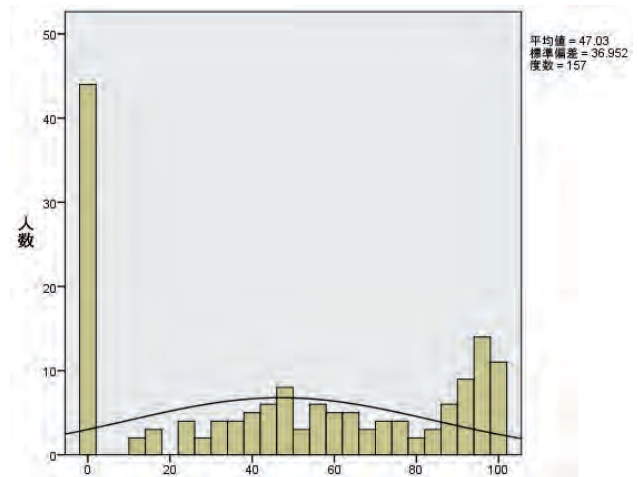


図22 再履修者の語彙（英語から日本語）テストの結果（秋）

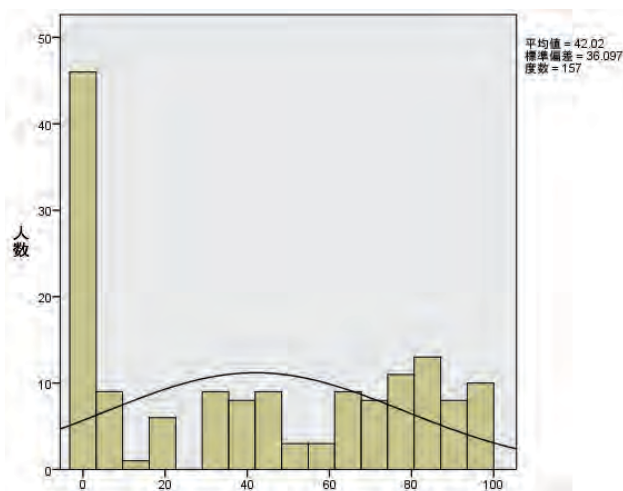


図20 再履修者の読解方略テストの結果（春）

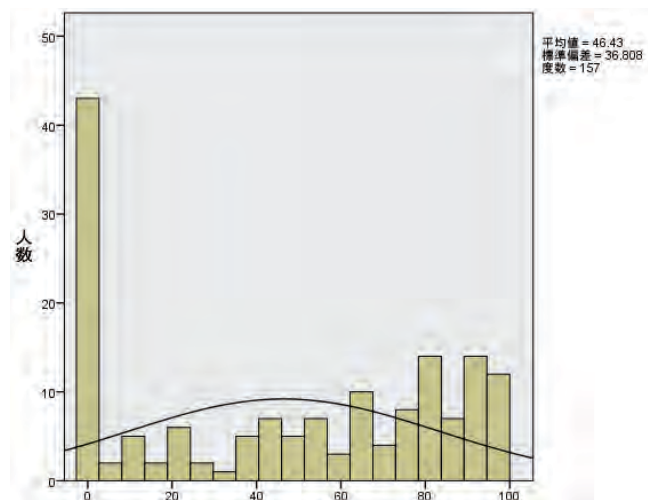


図23 再履修者の文法テストの結果（秋）

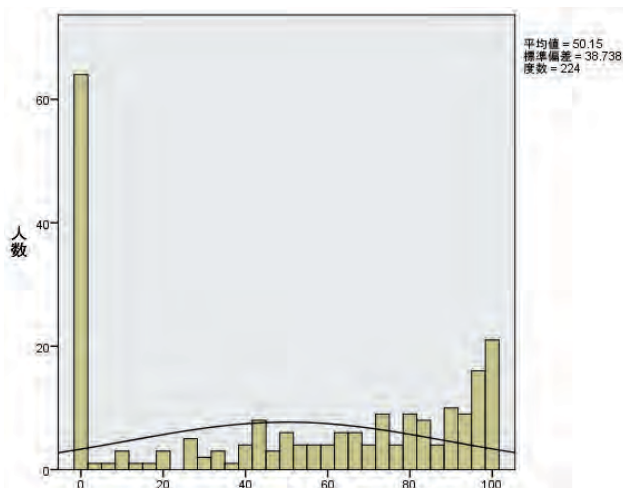


図24 再履修者の読解方略テストの結果（秋）

再履修者のどの結果を見ても0点の多さが目立つ。これは、履修登録をしてはいるが、一度も授業に出ていない学生が多いことを反映している。上級者や初中級者と比べると全体的に得点が低く、満点をとる学生の少なさも著しい。語彙問題では、日本語を英語に訳す問題よりも英語から日本語に訳す問題のほうが少し得点が高くなっており英語よりも日本語を覚えるほうが得意な傾向がみえる。再履修者のクラスは学力別編成ではないため、英語力や学科、学年が混在しており、それがテスト結果に反映されている部分もあるようである。

再履修者については、平成23年度より新入生とは別のクラスを開講し、1人でも多くの学生が単位取得できるような学習環境を提供している。しかし、まだまだ出席率の低さに起因する成績不良の問題が多く、この点はさらに検討が必要な大きな問題である。

3 フレッシュマンテストとプレースメントテスト

前述のように、入学時に「英語スキルⅠ」のクラス分けのためのフレッシュマンテストを実施している。また、「英語スキルⅡ」が開講されている12月に2年次のクラス分けの資料用にプレースメントテストを実施している。これらは比較可能な内容であるため、両者の結果を図25と図26で示しておく。

両テストの平均点はほぼ同程度であるが、フレッシュマンテストよりプレースメントテストのほうが満点の人数が多い。

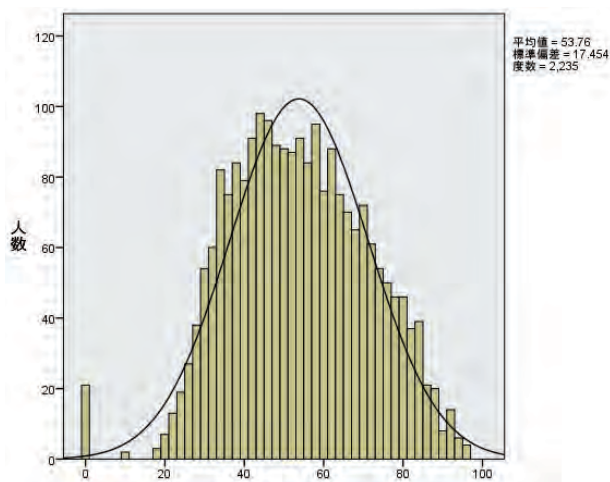


図25 フレッシュマンテストの結果

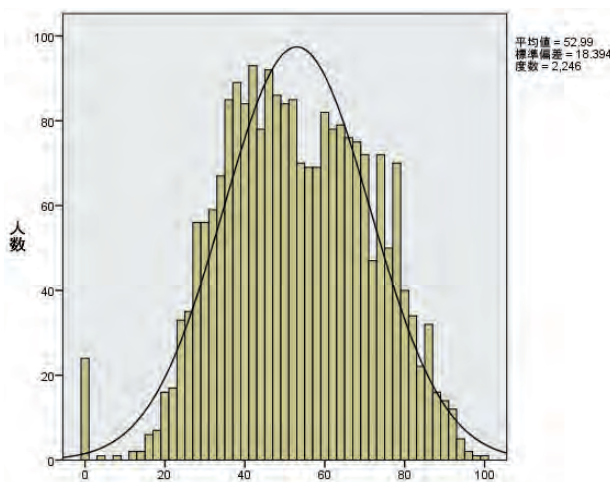


図26 プレースメントテストの結果

4 終わりに

到達度確認テストは、大門他（2011）でも報告したように、真面目に勉強すれば誰でも高得点が取れるように構成されている。また、全学英語教育科では、特に英語力に不安のあるクラスや学生のために小テストを用意し、担当教員が問題を自由に変更したり、部分的に利用出来るような対策をとっている。さらに、「語彙」、「文法」、「読解方略」は授業の柱であるため、評価の際にはテスト問題のこれらの3つの比率がそれぞれ等しくなるように調整を行っており、学生にもいづれもが重要と感じる指導をしている。よって、ほとんどの級の学生も高得点が多く取れたことは、科目が掲げる到達度に達成出来た成果であると言える。一方、上記のような背景のテストであるにも関わらず、再履修者の得点が決して高くない点は大変残念であり、現在再履修者クラスの学習達成目標や評価基準のあり方についての検討を行っている最中である。

全学英語教育科は、これまでの実践を踏まえ、本学の教育方針に則した新テキスト *Discoveries-Strategies for Academic Reading* を作成し、平成25年度から「英語スキルⅠ/Ⅱ」の授業で使用し始めている。このテキストは、理系や文系といった学問の枠を超えた学術一般に必要とされる英語である「一般学術目的の英語」(EGAP: English for General Academic Purposes) に焦点を当て、学術的な英語の読解を中心とした内容である。このテキストの詳細および使用結果などについては、今年度の授業終了後改めて報告したい。

謝辞

昨年度まで全学共通教育部全学英語教育科に所属され現在は人文学部英語英米学科の柳朋宏准教授を始め、常勤・非常勤の先生方には到達度確認テストの実施・採点・報告や助言を頂き、厚くお礼申し上げます。また、総合情報センターの平井慎治氏にはSPSS使用で多大な教授を頂き、心より感謝申し上げます。

注

- 1) 「英語スキルⅠ/Ⅱ」は旧カリキュラムの「フレッシュマン英語A/B」に相当する。完成年度を迎えていない一部の学科での科目名は旧名称である後者であるが、内容については、両者とも同じである。

参考文献

- 大門正幸・今村洋美・西村智・野田恵剛・山田伸明・柳朋宏 (2012) 「平成23年度秋学期の全学英語教育に関する報告」『中部大学教育研究』12, 81-89.
- 大門正幸・柳朋宏・西村智・野田恵剛・山田伸明 (2011) 「全学英語教育に関する中間報告」『中部大学教育研究』11, 87-94.
- 大門正幸・今村洋美・西村智・野田恵剛・山田伸明 (2010) 「大学英語教育に関する基本方針についてー専門教育機関としての大学における英語教育の在り方を巡ってー」『中部大学教育研究』10, 23-28.

准教授	全学共通教育部	全学英語教育科	和田	珠実
教授	全学共通教育部	全学英語教育科	大門	正幸
教授	全学共通教育部	全学英語教育科	今村	洋美
教授	全学共通教育部	全学英語教育科	西村	智
教授	全学共通教育部	全学英語教育科	野田	恵剛
教授	全学共通教育部	全学英語教育科	山田	伸明